
とある当麻の性転換

蒼井水晶

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

とある当麻の性転換

【Nコード】

N4645X

【作者名】

蒼井水晶

【あらすじ】

第三次世界大戦も終わり、平和に過ごしていた上条当麻に新たな不幸が襲いかかる！

目が覚めたら、女の子になっていた！？

学園都市中にそれが通達された！？何故、Why？

フラグ立てた女の子は逆に男に！クラスの男＆一方通行＆他の誰かにフラグ乱立！

女の上条属性は危険すぎる！

貞操の危機！？

助けて土御門！

L e t、s 性転換！（前書き）

突発的に書きました。

不定期更新になります。

お楽しみください。

Let、s性轉換！

私^{わたくし}、上条当麻は、今、人生最大の不幸に見舞われております。
あるべき上条さんの下条さんがないと言う。

そう、今俺は、女になっていたのだ！

インデックスはイギリスに行っており、この部屋には居ない。食費
が大幅に減るのは良いんだが……。

これはねえだろ……。

「不幸だー！ー！」

第三次世界大戦が終わって、しばらくたったからもう何もないと思
っていたのに……。

本当に不幸だー！！

ガラッ！！

「上やん！大丈夫か……にや？」

「土御門……。つちみかどー！！」

《SIDE：土御門》

ねーちゃんからの電話で、古代文明の魔術が発動。『神上』の可能性
がある人間を死に至らしめるはずの効果だった。

上やんの所に急行した俺は、望みたくない上やんの死体を見るのだ
ろうかと思いつつドアを開けたのだったが。

そこに居たのはなんとかわいらしいショートカットが似合う少女
だった。

「にゃー！ーvふおいのびfはいvるふいほh？おhbf！ー！」

言語化出来ない。あの上やんが。なんとも守りたくような身長（1
55？）何げにある胸（80ぐらいだろう）が、

俺に抱きついたのだから。

「ひくっ、えぐっ、つちみかどお、私、これからどうなるの、ひぐ
っ」

上やんは、泣いていた。どんな時にも泣かなかったあの上やんが。まだ、原因が分からなく、どんな魔術かも特定出来ていない。俺にはただ、抱きしめ返すことしかできなかった。一人称が『私』になつてるにゃー！それは良いとしても、理性が崩壊するにゃー！涙目＋上目遣いは危険二ヤー！

《SIDE：上条》

思わず、押し寄せた不安に泣いてしまった。

上条さんは情けないことですよ。

「上やん、原因不明の魔術が、上やんをおそつたにゃー。上やんの幻想殺しでも打ち消しけれなかったんだぜい。アレイスターが学園都市中にこれをなぜか知らないが通達したにゃー」

「上条さんには話の筋が分からないんでせうが？」

なんだその魔術は。

「なんだにゃ？ねーちん。なんだって！？」

土御門は神裂と電話しているようだった。

途中で大声を上げて、びくつとした俺はまた、少し泣いてしまった。

「わかつたにゃー」

土御門は電話を切り、こっちを向いた。

「上やん、泣いちゃだめだにゃー」

と言われて顔を上げると、ぺろつと、目の下をなめられた。

「????????」

俺は顔を真っ赤にしてしまう。

「何をするんだ土御門！」

「泣くとせつかくのかわいい顔が台無しだにゃー」

でも、土御門って、サングラス外すとかっこいいんだよな、背も高いし、筋肉もいい具合についてるし、私は好き……。

bmlbjnkvnhjのjつbmjhvjよbつhm……！

私は何を考えているんだー！

（まずい。上やんがかわいすぎて、ついやってしまったにやー。カミジヨ―属性が男に來るとヤバイゾ）

「上やん。よく聞いてくれ。まず、女の子になつてゐる間は幻想殺しは使えない」

！！そうか……わたし。

「一人称は私になる」わたし
ふむふむ。

「そして、これが一番重要だ。……、上やんに気があった女の子は全員イケメン男子になっている。常盤台が男子校になったにゃー」

「なんだってーーーー！！！！！」

このときの上条麻の絶叫は学園都市中に響いたそう。

Let's 性転換！（後書き）

突発的に考えたモノです。

反省しております。

「とある少年の転生人生」^{アンノウンライフ}が主連載です。「とある少年の転生人生」^{アンノウンライフ}はシリ阿斯が多いので、息抜きにでもどうぞ。

いきなりピンチ！？（前書き）

「とある少年の転生^{アンノウンライフ}人生」の主人公も出ます。
しかし、本編とはだいぶ口調が違います。

いきなりピンチ！？

なんだかんだあったけど、学校に登校することになった私と土御門。

いつもの公園を横切っている辺りでまた不幸がやって来た。

こけたのだ、私は。しかも土御門の目の前で。

「が、眼福にやー」

と言って盛大に鼻血を噴き出して倒れてしまった。

確か、履いたのはピンクの下着だったと記憶している。後で土御門は殴るとして。

その時パニックに陥った私は裏路地をめちやくちに駆け抜けた。

そこでまた不幸に出会った。

不良に私はぶつかってしまった。

「おいおい、何すんだ、テメエ」

男の時にはそこまで怖くなかった不良が、性別が変わるだけでこんなにも怖くなるなんて。

「あ？結構かわいいじゃねえか。相手してくれよ」

と私の手を掴み、たまり場であろう古い、廃棄されたマンションに連れて行った。

男の時には振りほどけたその手が、今は振りほどけない。いきなり好きでもない相手とヤツて処女喪失か、と絶望したその時。

「おい！何してるんだあんたら！」

救世主が現れた。

少し、大げさかもしれないが、その時の私にはそう見えた。

雷撃の槍を放ち、牽制した少年。常盤台っぽいブレザーとズボン。そして電撃。

「御坂……か？」

「そうだよ。上条さん。今助けてあげる」

全然口調ちがうじゃん。かっこいいよ。

「デメエ、超電磁砲レールガンだな！」

「うるさい！」

不良が吠えたのと同時に御坂も吠えた。

私の体はビクツと震える。

どうも、大声に弱いようだ。

「何間抜け面さらしてんだ？上条」

さらにもう一人、私の戦友とも言える少年。いや、青年かな？

「たくつ、超電磁砲が付いてこいつて言うからきてみたら、なんだよ、色恋沙汰かよおもしろくもねエ」

七城優一。学園都市第二位の能力者で、震動を操る。また、私と一緒に戦い続けてくれた大切な友人。現在、世界最強の人間の一人。

魔術を破壊する大剣や、「悪魔の力」を撃ち出す銃。謎の兵器など、知らないことはたくさんあるが、ローマ正教を壊滅させたり、神の右席のうち、二人を殺害したりなど、行動は謎に包まれても居るが、「大切な人」を守るために戦っている。

私たちの学校の制服ではなく、よく分からない、自分の身長よりでかい大剣を背負ったり、腰に弾丸ベルトを巻いたりしたパンクな服装。

ちなみに実弾。

（デビルメイクライ4のネコの服装です。腰の弾丸ベルト以外）

『コクケンフネギリ
黒剣船斬』

大剣を背負った状態から袈裟懸けに振り下ろし、私が連れて行かれそうになったビルを文字通りばっさりと真つ二つにした。

まさに世界最強。

「ひえええええっ」

私の手を握っていた不良は一目散に逃げていった。

「ツチ。小物が」

うわー、面白くなさそう。

「第三位、上条は僕が送って行く。同じ学校だしな。だから速く学

校に行きやがれ」

「でも……！」

「さっさといけ！斬るぞ！」

脅しだよそれ！

「分かった」

御坂は納得行つてなさそうだったが、学校に行った。

「さて、瞬間移動するぞ。齒^{マシ}ア食いしばれ」

えええっ！本気かよ！

インサント・ゼロ
『縮地』

次に目を開けたときには私たちの学校の校門だった。

いきなりピンチ！？（後書き）

どうだったでしょうか？

オリキャラの武器や能力、技は「とある少年の転生人生」アンノウンライフを読んでみれば分かります。

驚く小萌先生！（前書き）

今回は短めです。

驚く小萌先生！

優一と私は校門に着いてから急ぎ足で職員室へ向かった。

さりげなく私をかばうような位置に立ってくれている。こういう気遣いが出る男の子ってなんかいいよね。

（私も『元』男だけど）

私は彼に何度も助けてもらってる。本当に感謝してもしきれないくらい。

彼は自分のことを、

「当麻とは違う。僕は敵を容赦なく殺す、だから、当麻みたいな救世主^{ロー}にはなれないのさ。僕は、秋紗を守ればそれで良い」
そう言った。男のときの私はもちろん反論した。

「ふざけんな！何でお前はいつも

「僕は当麻^{あんた}の影。言うなれば、闇^{ダーク・ヒーロー}の英雄だよ。終わらない宿命^{たたかい}を背負っているんだ。

詳しくは言えないけどね」

そのときの優一^{アイツ}の顔は。

とても寂しげで。

私は、それ以上何も言えなくなってしまった。
でも、絶対アイツの秘密をいつかは知りたい。
それが幻想だつてんなら、その幻想をぶっ殺す。

「おい、当麻。当麻！」

「な、何！？」

「職員室ついたぞ。さっさと行ってこい」

「あ、うん」

えーと、子萌先生はどこかなあ？

「上条じゃん！？本当に女になってるじゃん！けっこうかわいいじゃんよー！」

って黄泉川先生！小萌先生じゃなくてあんたかよー！！

「はあー。黄泉川せんせ、ロリ先生はどこすか？」

「ロリじゃないですよー！！！！」

「ああ、居た。小萌先生、こいつが当麻です」

と、先生の抗議を華麗にスルーし、私を指差す優一。もう少し先生敬わなくちゃだめですよ……。

「かかか、上条ちゃん！？本当に女の子になっちゃってるのですよー！！！！」

「ええ、まあ」

「さっさと教室へ行きましょう。ここで喋っているとチャイムが鳴っちゃう」

「そうだね」

驚く小萌先生！（後書き）

いかがだったでしょうか？

次回は教室でドタバタ&あの人が転校してきます。
それでは。

教室でドタバタ！（前書き）

上条さんが完全に女性化しています。
お気をつけください。

教室でドタバタ！

優一を先頭にてくてく教室へ。

私は身長が男の時より小さくなっているから、目線がかなり低い。目の前の優一を見上げる。

『前方のヴェント』との戦いで、「悪魔の力」を完全に解放し、魔人となって圧倒的な力でヴェントの存在そのものを消してから、髪の毛は銀色となっている。本人曰く「黒には戻らない」そうだ。

彼は一方通行アクセラレータより見つけやすい。背中の大剣とその銀色の髪が目立つ、それに足首まである真っ赤なコートに黒の上下にファスナーがついたフリース、Tシャツに、赤色のズボンに赤いブーツ。

学校に行くのに学ランじゃないの！？

一方通行と戦ってからずっと彼は学生服を着て来ていない。

黒が赤を基調としたロングコートにフリースやパーカー、それにジーンズのような服装をしていた。

夏でもロングコートは外さなかった。何故！？

さすがに暑かったのだろうか、地肌にコートを直接羽織っていた。コート着るなら普通にシャツ着とけよ！！

「着いたな。さあ、当麻。行つてこい」

ここで私を教室に入れるの！？騒ぎが酷くなるよ！

「いいから行けっ」

ぎゃー！！！！

ドガンッ！！

首根っこ掴まれて教室に投げ入れられたよ！？

「誰っ！？」

「どうも、吹寄」

「上条か！？貴様本当に女になっているのか！？」

「そうなのですよ……」

ちなみに今の私の状態は、顔が吹寄の母性のかたまりに埋まってる状態です。はい。

「本当に。女の子に。なってる」

姫神か。男になってないな。良かった。

「ほんまにその小さい子が上やんやと!？」

青ピ……。心配してくれるのか。

私は吹寄から離れ、青ピに向き合った。

そして青ピは膝をついて私にこう言った。

「上やん！結婚しよう!!」

ええええええええ!!!!!!!!

「なに寝言言ってんじゃおんどれエエエ!!!!」

とエセ広島弁を言いつつ、

「がふっ!!」

青ピに飛び蹴りをかましたのは優一だった。

「ったく、油断も隙もねエ」

「ありがとう、でいいのかな？」

「それでいいんじゃないかにゃー」

土御門！よくも…。

「よくも私のパンツみてくれたなー!!」

うりゃあ！

パンツ！

あれっ？

「上やん……。男のときも俺に勝てないのに、それより力が弱い女で俺に攻撃が届くと思ってるのかにゃ？」

そして私の耳元へ口を近づけてこう言った。

「まあ、強気な上やんを征服するのも、いいかもしれないんだぜい」
耳元で囁かれて、私は身体が硬直する。

「だから、起きてんのに寝言なんざ言ってるじゃねエっての」

優一が呆れたような声音で言い、土御門に強烈な前蹴り上げを打ち込んだ。

「にゃー！ー！！！」

土御門は文字通り、天井に突き刺さった。

優一強すぎじゃない！？

「何か教室が不良の大喧嘩の後と化してるのですよー！！！」

小萌先生、その言葉を最後に凍結。

優一はというと、

「あーあ、だりい」

と言いながら首に掛けていたヘッドフォンを付け直して音楽を聴き始める。

かなり大きい音量で聞いているのか、英語のヴォーカルの声が音漏れしている。しかもかなりアップテンポなロック。

アクセラレータ

ただ、私はこの教室にいるはずの一方通行が何も言ってこないのが気になり、席の方へ目を向けると口をあんどぐり開けたまま、私に見入っていた。

あらま。

教室でドタバタ！（後書き）

いかがだったでしょうか？

次回は一方通行中心で話が進む予定です。
それでは。

秘密の会話！？（前書き）

「とある少年の転生人生」のネタバレがあります。
気をつけてください。

秘密の会話！？

あ、そうそう、言うのを忘れていたんだけど、姫神は優一に一目惚れしちゃったんだって。

それまでは私が好きだったみたい。

おっどろいたなあ。

それはともかく、一方通行が完全に凍結しちゃってる。なんとかして解凍してあげないといけない。

「おい、一方通行、だいじょうぶー？」

「はっ！ーう、うるせエ、除いてくンじゃねエ！ー！」

一方通行は顔が真っ赤だ。どうしたのかなあ？

「H a h a h a : H a - h a !」(和訳：ハッハッハッ：ハッハー！)

と私と一方通行がいいふんいき(なぜか変換できない)になっている後ろでは、楽しそうな笑い声(アメリカ風挑発)を上げながら大暴れしている戦闘^{七城優一}狂がいる。

「三下ア、お前、オレに近づくんじゃねエぞオ」

(そうでもしねエと理性が吹っ飛んじまいそうだ)

「え……どうして？私のこと……嫌い？」

やっぱり、わかりあえないのかなあ……グスツ。

(涙目＋上目遣いで見つめるなアアア！！！理性が崩壊するウウウ！！！！)

「い、いや、違うけどよオ、お、オレは悪党だ。ヒーローにはなれねエよ」

「今、私は『^{イマジンプレイカー}幻想殺し』の^{レベルゼロ}ないただの無能力者だよ？それでも一方通行は私をヒーローと呼ぶの？」

「アア、三下に影響を受けたのは確かだからなア」
「そうなんだ……。」

「なあ、一方通行」

「なんだ。土御門」

「カミやんは様々な魔術結社から命を狙われているんだぜい」

「それがなんだってんだ？」

「今カミやんには『^{イマジンブレイカー}幻想殺し』がないにや。ただの一般人だぜい。そんな時に護衛がいないと大変な事になるにやー」

「だからテメエは何を言いたいんだよオ！！」

「つまりだにやー、カミやんをほっぽらかしにしておくとか誘拐されるばかりか、慰みものにまでされる可能性があるにやー。今のカミやんはかなりかわいいからにやー」

「なん…だと！！そんなことは絶対にさせねエよ！！」

「当たり前だぜい。だから一方通行にはカミやんの護衛をたのみたいんだにやー」

ふたりそろって何を話してるんだろう。

「上条、こっちへ来い。ここは危ない」

と、私は吹寄に引つ張られていった。教室の外に。

「Hey! What's up!」(和訳: オイ! どうした)

相変わらず、優一は暴れてるし、土御門と一方通行は話し込んでいるし、ヒマだなあ。

「そんなの、^{マクニチユード}世界滅亡に頼めばいいじゃねエか。なんでオレなんだ。アイツは便利屋なんだろう？」

「優やんは闇を殺す者なんだぜい。^{ダイクスレイヤー}それ以外の仕事だったたくさんあるんだにやー。^{デヴィルキル}悪魔殺しで、金稼いでるし、今はとびっきりの要人の近衛騎士なんだぜい^{ロイヤルガード}」

「だれだア？ そのとびっきりの要人ってのは？」

「イギリス七大貴族の一人にして、イギリスの最重要機密。『ウェスタの巫女』のフィオナ・スコット・ハーベルだにやー」

土御門の話が聞こえた！

『ウェスタの巫女』って確か、クーデターで第二王女に真っ先に狙われた人よね……。

確かその時の任についていたのが優一だったのよね。^{ミカエル}天使長の力を

受けて、力を増した騎士団長と互角に戦って退けたとか何とか。
優一恐るべし……。

「で、なんで第二位がその任務についてるんだア？」

「詳しくは言えないんだぜい。学園都市で魔術師が暴れて、それを引き取りに来たのが出会いだにやー。まあ、その後便利屋営んでる優やんに最大主教自ら、依頼したらしいんだぜい」

「へー、そこまでは知らなかったなあ。」

「ンで？」

「フィオナ嬢、通称フアナ様だが、『その美貌は天をも落とす』と称される絶世の美少女だにやー。他の貴族達からの求婚が山のようにあるんだぜい。なかには、強硬手段に訴えてくるヤツもいるんだにやー。自分の下卑た欲望のままに行動するやつとかにやー」

「それで？だからンだつてんだ？」

「『ウエスタの巫女』は神性が求められる。恋愛ならばいいらしいが、そんな犯罪じみたことされてはイギリスの魔術的防護はガクンと下がる事になるんだにやー」

「めんどろだなア。それで？」

「だから、優やんを破格の報酬で雇ったんだにやー。こつから先は俺の推測だが、二人は出会った当初から惹かれ合っていたんじゃないかと思うんだぜい」

この話を聞いて、一方通行の目が俄然輝き始めた。
もちろん私も。

土御門の話を聞き逃さん、とするように。

「フアナ様は心を抑圧されていたんだにやー。面倒臭い貴族の礼儀とか、『ウエスタの巫女』の事とかをずーっと、叩き込まれて育つて来たんだにや。毎日監視されてるようなもんだ」

「それは、ム力つくなア」

一方通行はそう呟いた。

「皆、『ウエスタの巫女』としての絶大な権力の付属品としか自分を見られない社会の中で育ったフアナ様が、逆に『ウエスタの巫女』

では無く、『フィオナ・スコット・ハーベル』として見てくれる人間が現れたらどうなる？」

「それは、喜ぶし、心を開くよ……」

私は思わずそう呟いた。

「そう、だから、フアナ様は優やんに惹かれたんだぜい」

「じゃあ。優一君はなんで？」

「優一は強すぎる。強すぎる故に孤独だ。だから、同じ孤独を感じたフアナ様に惹かれたのもあるようだが、その笑顔を守りたい、そう思っていたのがいつの間にか恋愛感情に発展していったんだやー。アイツの魔法名はNotera129（我が剣は君の笑顔のために）だしにやー」

わー！、優一の魔法名なんて初めて聞いたよ。しかも『我が剣は君の笑顔のために』ってなんかかつこいい！！

「フアナ様の方も襲いかかってくる連中から命がけで守ってくれる騎士に悪い感情は抱かないんだにやー。フアナ様が手に入らないことに業を煮やした貴族どもはクーデターに乗じて、フアナ様を誘拐する計画を立てたんだにやー。そして貴族どもは動かせる全戦力を投入して、近衛騎士二人、優やんともう一人、ロイ・ミイスを殺しにかかったんだぜい」

ロイ・ミイスってあの爽やかな金髪のイケメンさんのことだよな！やっぱり強かったんだ！

「ロイ・ミイスは一人でイギリスに残って、二人を国外に逃がしたんだにやー。その、二人の逃避行で愛が確実にめばえたんだにやー」

「つまり、優一は、フアナ様の心を盗んだってことだね」

「大当たりだぜい、カミヤん。貴族達は魔術戦艦の大艦隊までも起動させて2人を追ったんぜよ。頭に重傷を負った優やんはその重体のまま中東の紛争地域を走り抜け、様々な妨害を退けながら学園都市に辿り着いたんだぜい。だが、優やんは瀕死の状態だぜよ。魔術砲撃を浴びた優やんは、その効果により、血が止まらなかったのだにやー。そこでフアナ様は『ウェスタの巫女』の空間移動術式で、

エリザリーナ独立国同盟へと歩を進めた。治療してもらった優やんだったが第三次世界大戦に巻き込まれるんだぜい。その中で、右方のフィアンマの攻撃によりファナ様は軽い怪我をするんだにゃー。それでブチきれた優やんは、大天使、神の力と『ベツヘレムの星』を撃墜。神の力に至っては消し飛ばされたにゃ」

「それで？そのクソ長い説明で、言いたいことはなんだ？」

「つまり、優やんは手が離せないということだにゃー。それに……」
ここでまた土御門は一方通行の耳に顔を寄せた。話が聞こえなくな

った。
「もし、カミヤんを守りきったら、好きになつてくれるかもしれな
いにゃー」

「なっ!?!」

一方通行の耳が赤くなった。

「まあ、そう簡単にフラグは立てさせないんだぜい」

「ンだと!?!」

「俺もカミヤんはかわいいと思うからにゃー」

優一と小萌先生はいつの間にかどこかへ行っていた。

それにより、吹っ飛ばされたクラスの皆が戻って来ている。

優一は何処へ行ったんだろう？

まあ、いいや。席に着こーっと。

ちなみに話してた2人も席に着いている。

秘密の会話！？（後書き）

いかがだったでしょうか？

次回はオリキャラの登場です。
それでは。

転校生！（前書き）

オリキャラが出ます。

「とある少年の転生人生」メインヒロインの、ファナとエリシアです。&ネタバレがあります。

転校生！

皆が喋りつつ待っていると小萌先生が入って来てこう言った。

「皆さん！いいお知らせがあります！」

「なんやー！」

青ピ……。そんなすぐさま立って叫ばんでもいいだろうに…。

「野郎ども喜べー！転校生は女の子2人なのですよー！！」

うおおおおっ！！！！

教室がどよめいた。

「巨乳か！？巨乳なのか！？」

「何を言う！貧乳に決まっている！」

わーわー、ぎゃーぎゃー叫んでいる。まったく、話題が下品だなあ。

「うるっさー！ーい！！！！！！！！」

あ、吹寄がブチ切れた。

ゴンゴンゴンゴンゴンゴン。

「マシンガン……ヘッドバット」

「皆さん、静かにしてください！」

と小萌先生が言ったとたん、皆はピタツと静まった。

「入って来てくださーい」

入って来たのは、どこまでも透き通るような空色の髪を、毛先の跳ねたボブカットにした絶世の美少女。

私は思わず叫んでいた。

「ま…まさか、フィオナさん！？」

そう、彼女こそ土御門の話に出て来た『ウエスタの巫女』、

フィオナ・スコット・ハーベル。

私の方を向いたフィオナさんは、はにかむような笑顔を、その整った顔に浮かべた。

うおおおおっ！！！！

まるで、地震が来たような揺れ。

それが、優一の起こした地震ではなくて、クラスの男子の歓喜の叫びだと気づくのに、私は少し時間がかかった。

一人の男子がフィオナさんの前に出て来てこう言った。

「僕と永遠を誓ってください！！」

その男子は、はあー。思わず溜め息が出る。

……青ピだった。

「なーにすーんねーん」

青ピを無言で引き摺って行ったのは土御門。

それを困ったような笑みを浮かべながら見送ると、クラス全員に向けて言った。

「ごめんなさい。私には、心に決めた人がいます」
さすが貴族のお嬢様、断り方も品がある。

まあ、私の感想はともかく、男子が吐いた溜め息に、教室は包まれた。

「残念……言い交わした人がいたか」

とかなんとか男子Aが言ってるけど。

「お嬢様！！」

そのとき教室に駆け込んで来た白銀色の髪 of 青年、皆さんはもうお分かりだろう。（皆さんって誰だよ。）我らが第二位、七城優一である。

全力で走り込んで来た優一に対し、フィオナさんは悪戯っぽい笑みを浮かべてのたまった。

「もう私はお嬢様じゃないよ？」

「……フィオナ様」

「ゆ・う・い・ち？」

唇の前に人差し指を持って来て、投げキッスをするように、その人差し指で優一の唇をつつきながら言う。

その仕草一つだけで、匂い立つような、それでいて清純な色気がフ

イオナさんから立ちのぼった。

（何を言ってるんだ私は！？）

それに対して優一は呆れたように頭を掻くと、優しい微笑みを浮かべて両手を広げた。

「……おかえり、ファナ」

「ただいま！！優一！！」

フィオナさんは見えているもの全てを虜にしそうな魅力的な笑みをこぼして、力一杯優一に抱きついた。

「優一、優一、優一！」

フィオナさんは優一に抱きつくと、胸に顔を埋めて、ただ、優一の名前を何度も呼ぶ。

「ファナ……」

優一は対照的に、フィオナさんの名前を一度だけ呼ぶと、「もう離さない」と言わんばかりにきつく抱きしめた。

いつもは邪魔をしようとする、愚か者の男子も、このときばかりは無言であった。

だが、その2人だけの空間を明るい声が貫いた。

「もおー！2人とも！私が入りにくくなるじゃない！」

その透き通る声を聞いて、フィオナさんを抱きしめていた優一が顔を上げた。

「エリシア！！あんたまで来たのか！？」

「当たり前じゃない！ファナだけじゃなく、私の心まで攫って行ったくせに！」

栗色の髪を、肩にかかるかかからないかぐらいのボブカットにした快活そうな美少女。

彼女は、エリシア・ミス。

土御門の話に出て来た、ロイ・ミスの妹だ。

フィオナさんと比べても遜色の無い美少女の登場に教室中がどよめき………

エリシアの言葉に、皆度肝を抜かれていたからだ。

「あんなに2人で激しく求め合ったのに!!!」

ブーーーーーッッッ!!!!!!!!!!

「ゴホッゴホッゴホッ」

教室中の皆が吹いた。

あ、違った。優一は咳した。

「いや、2人とも酔ってたし、キスから先には行つてねエだろ……」

「ファーストキスだったんだよー!!」

「……、俺はセカンドキスだったが?」

「何をトンチンカンな答え返しとんねん」

おおー! 青ピがついにツツコミに回った!

「知ってるよ! ファナとキスしてたことぐらい!!」

ブーーーーー!!!!!!!!!!!!!!!!!!

またも教室中が吹いた。

あ、違った。優一は真っ赤になっている。

「……分かった」

チュツ……

「んっ……ふっ……うふうっ!」

エリシアの口から時おり甘い声が漏れる。

「ぷはっ。いきなり何すんだ!!」

と、怒って腰の長剣を抜いて斬り掛かるが……。

「甘エよ、ファナやお前みたいにな」

ボンッ!

爆発したような音が聞こえると、美少女2人は真っ赤になっていた。

「気障つたらしい台詞吐いてますがー、二股なのですよー」

「……そうだ、そうだ!」

男子連中が一丸となって反論する。

「あー、それは、何と言うか……」

優一はなぜか言いにくそうにした。

男子が轟々と避難の声を上げようとしたとき、エリシアは思い出したように手を叩いた。

「女王様公認なんですよ」

「「「は？」」」

皆、目が点になる。

「だからあー、イギリスのエリザード女王ですって」

ええええええええええっ！！！！！！

驚きの声が教室中から広がる。

それはそうだ。いきなり、最高権力者の名前が出て来たのだから。

「エリザード様はこう言われた。『あの少年は、まるで自由を求める鳥のように飛び立って行ってしまう。それを防ぐには足枷一つでは足らぬのだ。ファナー人では到底あの自由な鳥を飼いならすことは出来ぬ。逃げ出さないようにするには、枷が2つ必要だ。エリシア、お主がもう1つの枷になるがいい。その恋と言う感情に蓋をしたくはないであろう？』と」

「ゆーいちも言ってたよね？」

「何が？」

「『お前ら2人を守るためなら、世界だって敵に回してやる』ってさ」

「……………、僕からしたら、2人がいれば…僕の生きる理由になる」

「相変わらず、凄い台詞を言うね。ななしろ」

滝壺。浜面の彼女であり、エリザリーナ独立国同盟にいた少女。

「はっ！惚れてんだ。悪いか？『ウエスタの巫女』なんて関係ねえ。

僕は2人が居ないと生きて行けないんだよ！！」
ファナとエリシア

この言葉で納得したのか、静かになった。

「「大好きっ！」」

2人揃って抱きつくなよ。桃色空間作るなよ。

「あー、ゴホンゴホンッ」

吹寄ナイス！わざとらしい咳払いだけど。

「あ、ごめんなさい」

「えーと、私は、フィオナ・ハーベル。特技は歌を歌うこと！よろしく願います！」

パチパチパチ。盛大な拍手が舞い起こる。

「私は、エリシア・ミス！特技は剣術と料理！よろしく！」

あ、私たちにちよっかい掛けたら問答無用で私たちの恋人に切り刻まれるからっ！そこんところよろしくっ！」

一瞬の静寂の後、また拍手が沸き起こった。

「ったく、お転婆だなあ」

と笑顔で言いながら、エリシアの髪をぐしゃぐしゃやっている優一。身長差が10センチぐらいあるのかな？

「何するんだー！！」

うがー！と暴れるエリシア。それを笑いながら押さえる優一。

優一が時折見せていた影は完全に姿を消した（と思う）。

小萌先生の連絡があり、HRが終わると、すぐさま2人への質問タイムが始まった。

3サイズを聞く馬鹿者がいたけど、優一に蹴り飛ばされるか、エリシアからの男の勲章に痛烈な一撃で、のびていた（笑）

その後2人は、私の近くへ来ると、私を見ながら優一に聞いた。

「この子が『元』上条当麻？」

『元』ってなんだよ。地味に傷つくぞ。

「ああ、そうだよ」

「ふーん。意外とかわいいじゃん。男のときは遠目にしか見てないからさー」

ま、その後色々質問されたんだけど、なぜか土御門と一方通行が競って質問に答えていた。

なぜ？

（カミヤんにかっこよくみられたいんだにゃー）

（三下のポイントを上げる！！）

土御門と一方通行の真意を上条当麻は知らない。
（かのじょ）

転校生！（後書き）

いかがだったでしょうか？

今回は甘めに仕上げてみました。

「とある当麻の性転換」は上条当麻の恋愛（鈍すぎて、好意を向けられていないのに気づかない）と、オリキャラの甘い恋愛模様を中心に展開します。

次回は放課後からの話です。
それでは。

オリキャラ紹介。(前書き)

今までに出て来たオリキャラを紹介します。
ほかにもオリキャラは出る予定ですが、とりあえず主役の説明です。

オリキャラ紹介。

ななしるゆういち

七城優一

学園都市第二位の震動能力者。能力名、マゲニチユード世界滅亡。

その名の通り、扱う力は地震の力。他にも、腕や脚に震動を纏って、高周波ブレードにしたり、同じく、衝撃を纏わせて、地震のエネルギーを直接相手に見舞ったりと、その破壊力は一方通行をも上回るとされる。

彼は魔術界の伝説『忘れ去られた剣士』の息子であり、『悪魔の力』を扱うことが出来る唯一の人間。

人間と言うよりは、半人半魔。

悪魔の力により、圧倒的な戦闘能力を有する。

（詳しくは、『とある少年の転生人生』アンノウンライフ第5話を参照してください）

その力は神の右席を消し去るほどの力。

通称『ダイクスレイヤー闇を殺す者』

便利屋『Devil With Dance』《悪魔と踊ろう》デビルキル

を営んでおり、『悪魔殺し』や、犯罪、魔術結社の壊滅、悪魔を呼び出そうとする愚か者（複数の場合もあり）を抹殺する、などの仕事をしている。

また、フィオナ・スコット・ハーベルのロイヤルガード近衛騎士。

フィオナ・スコット・ハーベル

元はイギリス七大貴族の筆頭に名を連ねていたハーベル家の出身。

『その美貌は天をも落とす』と称される絶世の美少女。しかし、後述の特殊能力や、貴族的な儀礼。自分自身を道具としか見ない、貴族達に絶望し、心を閉ざしていた。

そんな中、七城優一と出会い、交流しているうちに恋に落ちる。それを認めたくない貴族達にクーデターを利用し誘拐されかけるが、七城優一が助け出し、学園都市へと逃げて来た。

特殊能力『ウエスタの告示』

『ウエスタの巫女』が持っている特殊能力。

神の右席以外の、どんな魔術でも、詠唱、霊装などを必要とせず、ノーモーションで即座に発動が出来る。

これにより、魔術的な攻撃はすべて無効化される。

ロイ・ミス

フィオナの近衛騎士。

代々、ハーベル家に使えて来たミス家の出身。

『ガーディアン守護者』と異名を取る練達の剣士。

また、騎士団長と互角の剣の腕を持つ。

フィオナが心を開いていた数少ない人間の一人。

クーデターで、貴族の大軍を相手にし、3人を国外へ逃亡させた。

その後の消息は不明。

エリシア・ミス

ロイ・ミスの妹。フィオナお付きの侍女。

栗色の髪をボブカットにした美少女。

侍女でありながら、類い稀な才能を有し、その魔力はキャーリサ王女と並び称されている。

そのほかに、剣術、体術にも秀でており、そこら辺のチンピラなら軽くひねり潰せる。

『駆け抜ける風』の異名の通り、火、土、水、風の四大属性のなかでも、特に風の魔術を得意としている。

オリキャラ紹介。（後書き）

いかがだったでしょうか？

完全オリジナル設定も織り込んでいます。
それでは。

恐怖の体育！？（前書き）

オリキャラが二人です。

恐怖の体育！？

こんにちは。上条当麻です。

今、体育の時間です。女子更衣室で着替えてます&めちゃくちゃにされてます。

「うわー！上条君胸あるよー！私よりもっ」

「この前まで男だったのに！けしからん」

えー、状況は察してくれるとありがたいです。

今日は男子と合同で体育だそうです。

どこからか、歓喜の叫び声が聞こえた気が。

「しかし、女になるとは、珍しい現象もあつたものですね」

「そうだね。かみじょー、お前いつまで女なの？」

「上条さんはそんなこと知りませんのことですのことよ」

場所は変わって、校庭。

「はいはい、皆仲良いじゃんよー、今日は能力使用ありの女子対男子のドッジボール！ただし、一方通行は能力使用無しじゃん」

「ちよつと待ちやがれエ！それは不利すぎるだろオ！」

「その分上条を守るじゃんよー」

「つまり、最弱を守るためならいいんだな？」

「じゃんよー」

え、え、私？

「え、えつと……よろしく？」

と言って一方通行にペコリ。
アクセラレータ

（クソツタレエ、かわいいじゃねエか）

「しかたねエ。守つてやるよ！」

ちなみに私、上条当麻はなぜか男子チームにいます。普通私、女子じゃない？

「それじゃあ、スタート！」

ボールを投げる黄泉川。女子はもうスタンバっている。

「えーと……、雪降り！その上条君に当たれえ！」

白雪月夜、凍結操作能力のレベル3。能力名は、『絶対零度』
アフソリユートゼロ

雪を作ったり、物を凍らせる能力。

色白の肌に、黒髪の美少女。

「いきなり私かよっ！よしこんなときこそ右手のⁿ……あ、使えなかった」

「馬鹿かア！三下ア！」

「ったく、仕方ねえなっ！」

優一はそう言いつつ背中の大剣、たしか、『REBELLION』
リベリオン

だったか？に手を伸ばし、引き抜くと、

『DRIVE』
ドライブ

左から右に斬り上げるのと同時に強力な衝撃波を放った。

「は？」

「この節操無しのフラグまみれがっ！」

「ちよつと本気になったわたしの純情返せっ！」

「浮気者！信じてたのにつ！」

「でもそんな上条君がイイ！」

「私の想い、受け取ってええええ！！！」

「おいおい、マジかよっ」

バゴオオオンッ！！！！

その能力の集中砲火は――私を庇っていた優一に直撃。

「優一！大丈夫！」

優一は――傷一つなかった。

「……うっそお」

「ハッ！その程度か！軽いな」

あー、うん。そういえば優一って後方のアックアと互角に斬り合っ

たんだつ たつけ。

「じゃ、今度はこっちの番だ」

『黒剣 戦神』

大上段に振り上げた刀を地面に叩き付け、地を這うように衝撃波を飛ばす。

「任せてっ！」

エリシアが前に出て来る。

『ゲイルウエポン』

風を纏った長剣でその衝撃波を止めた。

「随分と力セーブしてるね。それじゃ私に勝てないよ？」

「What's you say?…Huh!」（和訳：何か言ったか？ハッ！）

あーあ、挑発に乗っちゃったよ優一のヤツ。

「ゆーいち私は私が足止めしてるからその間にっ！」

ガギン！ガガギン！ガギン！

剣戟の音が校庭に響き渡る。

「エリシア、僕を足止め出来るとでも思ってたのかよ！確かに腕は上げたみたいだけど！」

あらら、2人で決闘始めちゃったよ。

「今のうちだア、さっさと片付けちまおうぜエエエ！……！」

一方通行が吠える。

とは言っても、杖を持っている身体では避けるのも一苦労だ。

一方通行がボールに当たりそうになった次の瞬間！

「危ないにゃー！！！」

「ふげぶっ！」

土御門に蹴っ飛ばされた。

「テメエ！何しやがる！」

「助けてやったんだから感謝して欲しいにゃー」

「にゃーにゃー言つな気色悪イ！」

数分後。

私たち4人（私、土御門、一方通行、青ピ）は仲良く外野へ。

「仲良く4人外野なわけですが、そろそろ反撃といきませう」

「何言ってるんやカミヤん、ボクは女性の味方でっせー」

「あら？私モ『女』よ」

「……」

「まあまあ、ちょいと待つにゃー。ーおい。ここらで罰ゲーム
決めとこうぜい！勝ったチームが負けたチームを好きにできる！も
ちろんカミヤんも自由だにゃー」

「……乗った　　……」

即座に返事する女子一同。皆一様に目がギラギラしている。

「ちよつと待った、上条さんの人権はどうなるんでせう！？」

「あー、まあ、どんまいだにゃー」

「土御門オオオオ……」

「……うおおおおおっ……」

女子を思うがままに出来るとあつて男子も負けず劣らずテンション
が上がっている。

「なんか私だけ背水の陣みたいなんですがっ？」

「付き合いきれねエ」

「いやいや、付き合ってもらうでー。一方通行はんでええかな？呼
び辛いから

一方さんorー通さんでどうや？」

「どっちも却下だクソツタレ」

「じゃあ、一行（I K K O）さんだにゃー」

「死なすぞデメエ！」

「……、上条君人気だね。まあ、私も結構好きだし。一方通行もかっこいいけど」

そう言いながら、外野に向かって吹雪を起こした白雪。雪のせいで視界が悪いし、いい加減手が冷たい。でも、白雪自身は平気。なぜなら、自身の能力を使うため、いつでもどこでも、耳当てと手袋を携帯しているのである。（私はアックアか）

「ホラ、さつさとあの幻想をぶち殺せよ^{なだれ}」

「滅相もございませんよ最強！『こつから先は一方通行だー！！』
と言ってやってくださいよ。」

（まア確かに、この吹雪を消せばポイント上がるかもなア）
なんて思っている一方通行と下心が分からない上条当麻。

互いに互いを盾にしようと組み合いながら吹雪の中に消えて行った
我らがHEROES。

その吹雪のなかで、おもむろに一方通行が電極のスイッチを弾く。
そして私を後ろに庇いつつ吹雪を、剣戟の音が響く場所へとぶっ飛ばした。

「邪魔だっ！」

「邪魔っ！」

優一は砂を粒子震動させ、『砂嵐^{サイフルス}』を形成。

エリシアは魔術を高速詠唱、『竜巻^{ストーム}』を形成。

2人揃って飛んで来た吹雪に打ち上げた。

「息ぴったりすぎるにゃー」

「喧嘩するほど仲がいいってことかいな」

「で、お前らは人様の後ろに隠れて何やってるんですかア」

「カミさんと一方通行も息ぴったりやん」

私は一方通行の腰にしがみついたまま。

（くっそー、ポイントとられたにゃー）

「さアて、白雪とか言う雪女は場外確定だなア」

白雪は危険を察知したのか、雪の壁をつくり出している。

「危ない、月夜ちゃん！ボイスシャット声帯衝撃機動！

目標、上条当麻と一方通行！

総員対シヨック・対鼓膜破碎防御！発射10秒前！9、8、7……」

白雪を救うため、親友の茜川が能力を使おうとする。

ちなみに、何でこんな台詞を言っているのかというと、能力の機動に時間がかかるためである。

けっして宇宙戦艦ヤマ（自主規制）のせいではない。

って私は誰に向かって喋っているんだ？

一方通行は傍観者となっていた男子Dを掴んで放り投げる。

その先には雪の壁。考えるのがめんどくさかった一方通行はどうなるかも知らずに投げ込んだ。

「不幸だー！！」

男子Dドンマイ。

だが、私、上条当麻が不幸体質ならば白雪は逆。

「3、2、1、発射！」

茜川が声に乗せて放った衝撃波は男子Dを直撃。男子チームの方へくるくる回って戻って来た。

その戻って来た男子Dを『リベリオン』で場外ホームランにする優一。

あれ、いつの間に戻って来たんだ？

「エリシアちゃんはもうしたんやー？」

「あ、服を少々セクシーにしてやった」

優一が指差した方には、何ともセクシーな腹だしシャツとホットパンツ（体操着を斬って作った）をきたエリシアがいた。

なぜか、立とうとしても立てない状態。

「なにしたんや？」

「暴れてたから、キスして黙らせた」

「セクハラや!？」

「お前が言うな!」

「はい、そこでコントしなくてよろしいでせう」

そう言つて注意したところで、私は雪に足を取られ、白雪のそこそこある胸へダイブ。

「あ、ごめんなさい」

と女子から見てもかわいい顔（姫神談）でへにやりと笑顔。

「う、だめ、競争率高いもの、か、上条君、本気でもないのにそう言う事言っちゃかわいそうだよ、一樣忠告しておくけど、ど、どうせフラグ立てまくるんだろうけど!？」

雪が暴走して吹雪化。

「きゃあっ!」

フィオナさんが足を取られてころー！ー！ー！ばなかった。

「ファナっ!」

滑り込んだ優一がナイスキャッチ。

「愛の力だにやー」

「愛の力やん」

「愛の力だなア」

「この暴走台風警報の時に何をくっちゃべってるですかー!!というかこれはさすがの上条さんでも無理その前にドッジボールと言う事実はどこにー!!」

反論する私だが、奇麗にスルーされた。

「そつといえはそうだったにやー」

「こんな吹雪じゃどこにボールがあるかわからへんけどねー」

「というかよオ、俺が投げて、第二位がかつ飛ばしたアイツはどこに？」

「「埋まった」」

「（只今絶賛暴走中!!）えーと、こう言つときは、く、雲の温度下がれ……」

頑張った結果。

豪雨になった。

普段、雪しか降らせないので傘は持ってない白雪。電が降らないだけマシだろうが。

「止められねエのか、白雪！」

優一はフィオナさんを抱き抱えたまま、叫んでる。濡らさないように。

「というか、雲の温度下げたのに雨っておかしいだろ！制御めちゃくちゃになってんぞ」

「クソッ、これ以上はバッテリーが持たねエ。……ン？なんか雨が温かくなってねエか？」

おそろしや、フラグとはここまで人を狂わせるものなり。（あんた誰だよ）

「女子の勝ちじゃん。七城、あの雲けせるじゃん？」

「お任せあれ」

ドゴォンッ！！

大気を殴りつけて震動を伝え、雲を爆散させる優一。つくづく規格外だよなあ。

ただ、それだけでは終わらないのが私上条当麻。

優一の能力でぶっ壊されたコンクリ片が頭に直撃。気絶した。

逆にそれだけで済んだ私の方がおかしいらしい。

保健室で目を覚ますと、たくさんの女子が顔を覗いていた。

「起きたかにゃー。カミヤん」

「ハッ、なんだよ。生きてンじゃねエか」

「そんな事を言いつつ見舞いにくるツンデレのアクセラレータ。略してツンデレータ」

「死ね！」

土御門と一方通行の馬鹿な会話はほつといて。

「あ、上条君さっきはごめんね？お詫びに雪だるま」

自分の能力で、雪だるまをつくってきたらしい。

念のため左手で受け取りながら、どうしようか考える私。

帰りのHRでは、明日から行く修学旅行の話をしていた。

帰りに御坂に会って、修学旅行はどこに行く？と聞いたら、「近場の温泉」だそうだ。

まさか……ねえ

だが、この私の予感はあるのであった。

恐怖の体育！？（後書き）

いかがだったでしょうか？

次回は修学旅行初日をお送りします。
それでは

行事ってかぶるものでしたっけ？（前書き）

少しシリアス？かもしれません。

行事ってかぶるものでしたっけ？

時は飛んで、バス車内。

私たちは修学旅行へと向かっていた。（修学旅行と言っても、近場の温泉なんだけどね）

「この席順には何かの陰謀を感じるんやけど」と青ピがぼやく。

彼の隣は土御門、男子A、B。

見事に女子が居ない。

あ、私の隣は一方通行。^{アクセラレータ}

「先生の決めた席に文句あるですか……」
今にも泣きそうな担任教師。

「にやー！そんなことぜんぜんですたいっ！ていうか一方通行！黄泉川先生含め三人の女性と住んでるって本当かにやー！」

「アア？うるセエンだよ。スクラップにされたいのかア？オレは寝んだっつの」

ついでにベクトル操作のおまけ付き小石を、土御門に向かって投げた。

「このバカーっ！」

いまにも寝ようとした一方通行に私の右手が炸裂する。
今は反射してなかった。良かった。

「デメエ、なにしゃがー」

「あなた、今寝るって言った？その台詞を私たちのために一生懸命バスレクを準備してくれた小萌先生の前で言えるのかしら！？」

「アア！？なに言ってやがンー」

一方通行が視線を向けた先にはうるうると涙目の小萌先生が。
古今東西、一流の悪党は泣いている女性には勝てないのだ。

「チッ……、さっさと始めやがれ」

「よーし、みんな！ビンゴ大会の時間だよっ！」

「『おーーーーー！！』」

ビンゴ大会で一個も穴を開けられずゲーム終了と言う、奇跡的な敗退をするのは別の話。

「にゃー、べ、ベクトル操作はずるいにゃー」

土御門が言うには、自分の能力を最大限活用したらしい。

私は、私をからかったり、馬鹿にする一方通行を睨む。

（イイねエその視線！オレの女にしくなっちまうぜ！）

横に居る白雪や茜川が、くすくす笑うくらいに楽しいやり取りだろ
う。

「あんだけ言つといてそのザマかよ、ざまアねエなア」

「これくらい不幸は想定内ですコンチクショー」

「女の子が汚い言葉使ったらだめよ。上条当麻」

エリシアに注意されちゃった。

とか言いつつ、旅館の中に入る一行。

「あ」

そして立ち止まる私。受付で自分達の高校以外に『常盤台中学一行様』と書いてあるのを見つけたからだ。

「……、はは、やっぱりな。心の準備をしてきて良かった」

『必要悪の協会一行様』

「ぶーーーーーっつっ！！！！」

いくら心の準備をして来た私でも、そこに書かれていたもう一つの団体名を見れば盛大に吹き出さざるを負えなかった。

もろ想定外の範囲よっ！！

「どうした？」

と優一が名簿に駆け寄る。そこに書かれていた名前を見たたん、
険しい顔になった。

「あん？まだ追って来る気か。クソツタレが」

そつえば、フィオナさんと逃げる時、何人かの『必要悪の協会』

の魔術師に追いかけられたんだっけ。

チャキツ……。

太もものホルスターから、拳銃を抜いていつでも撃てるように構える。

それと同時にエリシアに指示を出した。

「エリシア、ファナ様を」

「りょーかいっ」

エリシアもいつもの様な軽い調子で答えるが、その目は冷徹な光を帯びていた。

「あ、とうまだ。おーい！」

さらにタイミングよく現れる一様必要悪の協会所属のインデックス。

「やけにおとなしくイギリスに行っと思ったたらそういうことかドチクショオーツー!!」

さらにステイルを始め、ぞくぞくと入ってくる怪しい一団。

その先頭の男（つまりはステイルだが）に優一は問答無用に発砲した。

「何の真似だい!!」

「あ? テメエ、主を狙った人間を殺そうとするのに理由が必要か?」

背筋が凍る様な冷たい声。

思わず私は一方通行にしがみついた。

「最弱!? 馬鹿! 離れろっ!」

「お願い……、このままにさせてっ」

（理性が飛ぶんだよアホがあアアアア……!!）

「落ち着いてください。闇を殺す者」

「……、クソツタレが……。2人に何かしてみろ……全員消す」

怖いからっ。

「やめて! もう終わったんでしょ! お願いだから、私の知り合いで殺し合わないでっ!」

私は思わず叫んだ。

「…………、チツ、甘ったれ野郎が」

「フン…………」

うわーうわーうわー。ステイルも優一もキレてるよ。

大丈夫かなあ。

行事ってかぶるものでしたっけ？（後書き）

次回はさらにキャラが登場します。
それでは

遭遇。(前書き)

えー、ごめんなさい。
はっちゃんけました。

遭遇。

「あれー？ステイルちゃんじゃないですかー？」

「っ！？（しまった！？日にちを合わせて来たはいいが、こいつの担任はこの人だったか……）」

「ていうかさあ、あの銀髪のシスターかわいくない？」

と横に居た男子Aに話しかける男子Bこと形原。

「うん、上条の名前を呼んでたって事は上条の知り合い？って土御門？何でそんな凄い顔をして固まっているのさ？」

土御門と話す男子Aこと井伊。

「べ、別になんでもないにゃー（何で必要悪！？なんでこっちに招待状が届かなかったんだ！？）」

「先生！私たちちよつとトイレエエエー！！」

「ちよつ、上条ちゃん！？上条ちゃんは女の子なのですよー！」

小萌先生の話をスルーしつつステイルと土御門を引きずってその場を離れる私。

「ぜえ、ぜえ、何でここに居るのか100文字以内でどうぞ！？」

「何でって、ただの慰安旅行だけど？」

「嘘よ！絶対、新手の魔術師が出たとかそんな話でしょっ！」

「ほほう、察しがいいね」

「やめて、私の楽しい旅行を壊さないで！」

と身長差から自然に見上げる様な形になる私。

（うつ、かわいい！いや、僕にはインデックスがインデックスがインデックスが以下ry）

「思わせぶりなこといつてるけどにゃー。なんにもないんだぜい」

「じゃあ、ステイル達今は完全にオフ？」

「そついうことにゃー。ズバリ、インデックスと一緒に行きたくったけど誘う勇気が出なかったからネサセリウス全体の旅行を企画し

たのかにゃー？」

これだけの長台詞をノンブレスで、しかも嘸まずに言えた土御門は凄いと思う。

「違うっ！企画したのは神裂達だ、インデックスと一緒に行きかけたのは彼達だよ」

「ちよつと待った。今彼つて言つたかしら？」

「そうだよ。君にかけられた魔術の範囲は全世界に及んだ。神裂、オルソラ、……君に好意を寄せていた女性達は男になったよ。しかもイケメンの」

「不幸だー！！」

「ちよつ！カミヤん、何で僕だけ置いてくの！？」

「ンだア？青髪ピラスから赤髪ピラスに乗り換えかア？」

「ガビーン！？こうなつたらアクヤん！新たなコンビ決定や！」

「うるせエ。勝手にあだ名付けンじゃねエ」

「ならいいんだけど」

それだけ確認できればいい、と皆の元に戻り、旅館に入る所で、

「え！？何で上条さんがここに！？」

「やつほー、兄貴ー」

「にゃ！？」

そこに居たのは、『男』の御坂美琴と、研修や何やらでついて来た『女』の土御門舞夏とご対面。

青髪ピラスをベクトル操作を使って地面に沈め、私たちの元へとやって来た一方通行。

しかし、そこに居たのはかつての敵でオリジナルの御坂美琴だった。「ンだとっ！？オリジナルまで男になってンのか！？」

あー、うん。そりゃあ、驚くか。

それ以外に言うことが見つからず、私の肩を掴んで御坂の方へ押し

やる一方通行。

私は鞆につまづきながらも、綺麗に御坂の胸へとダイブ。

「上条さんって以外と大胆なんですね。俺、うれしいです」

（ミスッた。オリジナルは最弱のことが好きなんだよなア）

至近距離で微笑まれ、赤面した私は後退し、後ろにあった鞆に足を引っかけ、盛大に転んだ。

「いったあ……」

「痛い！ってミサカはミサカは一方通行の鞆の中で人知れず叫んでみたり！」

「……アア？今、ミサカ？打ち止め？ラストオーダーなんでお前ついてきてンだア

！黄泉川ツ！ンでこいつがここにいるンだよッ！！」

隣の自分達のクラスに向かつて叫ぶ一方通行。アクセラレータ

なるほど、彼ならベクトル操作して重い物を重くないようにすることが出来る。

もしかしたら、荷物を詰めたのは他人任せだったかもしれない。しかし。

クラス一同「（いくら何でも気づくだろう……普通）」

「あー、持って来ちゃったのはしょうがないじゃんよー。一方通行が責任もって世話してやるじゃんよー」

とてつもなく棒読みな黄泉川先生。知ってて持って来たに違いない！！

「付いて来てしまったものはしょうがないんだよーってミサカはミサカは一方通行に抱きついてみたり！」

「開き直ってンじゃねエぞこのクソガキっ！っつか、さっさと離れやがれ！」

打ち止めの頭を押え込みながら叫ぶ一方通行。

「あああ頭ー！痛いっ！助けてってミサカはミサカは……はっ……！」

呆然としている私と御坂の後ろに隠れる打ち止め。

「パパー、一方通行がいじめるって、ミサカはミサカは告げ口して

みたり！」

「パパって、俺のこと？それはいくら何でも無理があると思うぞ」

「上条ちゃん？どういうことですか？はっ！そうやって並んでみるとその子、御坂さんにそっくりなのですよー」

「オイオイ、もうちょっとマシな嘘付けよチビ御坂。それじゃあバレバレだぜ」

と、否定する優一。

「ああ……、あの時の女の子か、えーっと？^{ラストオーダー}打ち止め？御坂、妹の妹よ。お前、一方通行と仲いいのね……、まあ、そんなに悪人でもなさそうだし……」

しゃがんで目線を合わせる私はきつと良き保護者。（に見えるだろう）

「か、上条ちゃんが母親っぽいです！？やっぱりその年で過ちを！？」

「いやいや、先生、違いますって！！ねえ、美琴さん？」

「えっと……、つまり俺ら夫婦ってこと（ノノノ）」

「ちよつと、何赤くなってるのよ、うつわ、私まであかくなりそーー」

「この類人猿がアアアアアアアー！！」

「その頭をカミチギル！」

笑顔で鉄矢を浴びて、噛み付かれました。

鉄矢の方は、優一が、

「Ha-ha！」（和訳：ハッハー！）

とリベリオンで撃ち落としてくれました。

いや、レポートしたのを撃ち落とすってどんな速さよ。

と思って優一をみたら、『^{リベリオン}REBEL^{リベリオン}LION』ではなく、^{レッドク}RED^クQU^{イン}EEN』を左手に握っていた。

ちなみにインデックスの首根っこも掴んでいた。
ありがたい。

「何で白井がいるの！？学年違うでしょ！？」

「お兄様……いえ、生徒を守るためです」

……、男になっても、百合的尊敬は変わらないのね。

「普通に考えて、当麻が4歳の時に出来る訳がねえぞ？何考えてんだあんたら？チビガキは超電磁砲レールガンの妹だろーが」

と優一に絶対零度の視線を向けられた。

遭遇。
(後書き)

いかがだったでしょうか？
次回は波乱の部屋決めです。
それでは。

波乱の部屋決め！？

「つつかよオ、打ち止めどこに寝かせンだよ？オレの部屋は獣（と書いて青髪ピアスと読む）がいるから無理だろ？黄泉川、どうすんだよ？」

「あんだ達のところにこの子を預けるのはものすごく不安だけど俺の部屋にも獣（と書いて黒子と読む）がいるんだよな」と言う一方通行と御坂。

「じゃあ、優一達の部屋は？」
と言う私。

「やめとけ。余計な戦闘に巻き込まれるのがオチだ」
一体何をやらかしたんだ、優一は。

そう思った私の心を読んだかのように優一は言った。

「アンチマターキャノン『反物質砲』で国一つ滅ぼして、島消し飛ばしたりしたから、恨まれてるのは確かだ。それに貴族の連中もまだまだ諦めてはいない。規格外同士の戦いに巻き込まれたくはないだろう？」

反物質。量子力学上存在する物質の対になるもの。反物質と物質が衝突すると対消滅が起こり、莫大なエネルギーを放出するとされる。その莫大なエネルギーは桁違いの威力を誇るらしい。

理論上は1？の物質と反物質を対消滅させると、 1.8×10^{17} の1乗ジュールになるといわれている。（全て優一の受け売りです）
また、反物質に触れた時点で私達は消し飛んでしまう。

優一曰く『悪魔つてのはどんなに雑魚でも、この世に現出した時点で、自分達の都合のいいように世界を改変できる』のだそう。

本人曰く『反物質に触れていても、身体が消し飛ばないように世界を改変すればいい』ということだそう。

規格外にもほどがあるだろ。
いけない、話がずれた。

クローンであるのがばれたらまずいので一方通行の応援をする。

「逆に考えれば、私達の部屋から青髪を追い出せばいいんじゃないかしら？土御門はロリコンだけど、義妹以外には手を出さないロリコンだしね」

「ちょ、ちょっと困りますよ！なにもせんから追い出さんといて！」
「これは決定事項だし、信用ならんにゃー。井伊のどこでも行けばいいにゃー」

と冷たく突き放す土御門。

「一方通行はこれでいい？」
と確認を取る私。

「……まあ、打ち止めはどうなんだよ」

「アナタと一緒にの部屋はとってもうれしいかも、ってミサカはミサカは両手を上げてみたり」

「ちょ、ちよっとお」

明るいきず気味の私たちと、それにすぎる獣（と書いて青ピと読む）のお話。

「待ちなさい！いくら小学生（？）でも女子が男子と一緒にの部屋でいいわけないでしょ！」

「その子は。私たちの部屋で。預かる」

「いやだーって、ミサカはミサカはあなたに抱きついてみたり」

吹寄と姫神から逃げるように一方通行に抱きつく打ち止め。

「にゃー、本人はこういつてるぜい？」

「どうすんです、ロリ先生」

……小萌先生のことをロリ先生と呼ぶのは優一だけなのよね。

「僕らの所は多分、貴族どもが雇った殺し屋なりなんなりが襲撃する可能性もあるし、僕も本業が溜まつてるんで、片付けなければならねえからな」

本業……悪魔殺しのことかな？

少しの沈黙が私たちを覆ったとき、井伊が提案した。

「先生、提案があります。多分あの子を別の部屋に置いても抜け出

すだけだろうし、あぶれた青髪を受け入れてくれる人もいないと思います。ていうか御免です。ここのクラスの男子だけでも大部屋に雑魚寝にして、みんなで見張れば問題ないと思います」

「むむむ、たしかにそうだにゃー」

「何かずいぶんと酷い事言われた気がするんやけど」

「男はみんなケダモノ。むしろ群れる方が危険。女子の部屋に。簀巻きにして転がして。置いた方がいいと。思う」

「そう言えば、優さんはどうなるんや？」

「え？ああ、僕たちは別館ですよ」

「せこいやん！おかしいやん！フィオナはんとエリシアはんと一緒にやろ？明らかダメやん！」

「僕はフアナ様の護衛ですよ？護衛が側にいなくちゃ、護衛の意味が無いでしょう？……それに、一応、そういうことをしても良い関係ではありますから」

「ってコラ！何言ってるのよっ！」

と真っ赤な顔で抗議するエリシアを華麗にスルーしつつ、優一は言った。

「あなたがたも、飛空戦艦の砲撃を部屋にブチ込まれるのはいやでしょう？」

飛空戦艦。優一達がイギリスから脱出する時に追って来たと言う魔術的な最新兵器。

その通り、空を飛ぶ戦艦である。イギリスでは、飛空空母を中心とした機動艦隊を組んでいるらしい。

ってまた話がそれたよ……。

「簀巻きはやめてーってミサカはミサカは涙目で訴えてみたり。ママ助けてー！とミサカはミサカは今度はママに助けを求めてみたり」

「えっ……ママって私！？」

ちよつとっ……。／／／

誤解を招く発言はやめて欲しいなあ。打ち止めさん？

「出来ればパパとママと一緒にの部屋がいい、とミサカはミサカは希

望を口にしてみたり」

「よしじゃあこうするじゃんよ！。その少年、もし良かつたら打ち止めと一緒にのへやじゃん。一方通行と上条（女）もいっしょにするじゃん。」

ああ、打ち止めになにかあったら一方通行が大変なことになるから安心じゃん。一方通行はいつも一緒に寝てるし。極めつけに災誤先生と一緒に部屋をたのむじゃん」

上条（女）ってなんだ、上条（女）って。酷いんじゃないの！？

その少年は嫌だったらいいいからね。と黄泉川先生。

まあ、災誤先生と一緒に部屋はイヤだし……と納得し始めたクラスの間々。

一番不幸だったのは私に違いない。（男子と同じ部屋に入れられたよ！？私も女子だよ！？）

そんな中一方通行だけは吠えていた。

「ヨミカワアアッ！！！！いつも一緒に寝てるとかテキストコイてんじゃねエエー！！！！」

「嘘はついて無いじゃん？この前も打ち止めを抱き枕代わりにしてたじゃんよー」

（そのとき一方通行は寝ぼけていたと言う大事な所は話さない黄泉川）

シュランツ。

ジャキンツ。

この場には不釣り合いな金属がする音がして、そちらを見ていると、エリシアが腰の長剣『亡霊殺し』ファントムスレイヤーを抜いていた。

もう一つの音は、優一が格闘武器『衝撃鋼』ギルガメスを手と足に装着。

と、思ったらフィオナさんが必要ないはずの魔術の詠唱をしている。確か優一に聞いた所によると、フィオナさんは、通常必要ない魔術詠唱をすることで、その威力を限界まで高め、さらにその限界を突破することが出来るとかなんとか。

彼らは、3人から受けたダメージが回復するまで、寒空の下に取り残されるのであった。

「こういうのは、いつもやったらカミさんの役やないの？」

「…………、クソツタレエ」

「ふ、不幸にやー」

「おい、大丈夫かー、兄貴ー？」

しゃがみ込んで、焦げた兄を木の棒でつつく義妹。

波乱の部屋決め！？（後書き）

申し訳ございませんでした。
反省しております。

外伝―強さランキング―（前書き）

えー、10部突破記念として、独断で申し訳ありませんが、オリジナルキャラ込みの強さランキングを勝手に作りました。

こんな感じで、10部増えることに、外伝を書こうと思っています。

外伝―強さランキング！

今回は、10部突破記念として、独断失礼ですが、この小説に出てくるキャラの強さのランキングをしたいと思います。

それでは、始まり始まり～！

第一位―― 七城優一（魔人Ver）
デビルトリガー

魔人化状態の優一。この状態だと、右方のフィアンマさえ寄せ付けぬほどの圧倒的な力を誇る。

その力は、『人間界』が歪むほど。

第二位―― フィオナ・ハーベル（解放状態）

『ウェスタの巫女』の力を完全解放した状態。伝説級の魔術を、フィアンマ以上の速度で連続で発動するなど、魔術界に置いてはチートレベルの能力。

第三位―― 右方のフィアンマ&一方通行（黒翼Ver）

フィアンマは原作敵キャラの中では最強だと勝手に思う。一方通行の最強形態（笑）とにかく強い！神々しい！

第四位―― 後方のアックア&七城優一（通常Ver）

『闇を殺す者』と称される優一（通常Ver）と互角に打ち合ったからかなり強い。格闘戦も含めて世界最強レベル。
ダークスレイヤー

七城優一（通常Ver）「とある少年の転生人生」の主人公。スタイリッシュな剣術と、クレイジーな射撃で、世界最強レベルの力を持つ。
アソウンライフ

第五位―― ナイトリーダー
騎士団長&ロイ・ミイス

後方のアックアにはわずかに及ばないものの、神裂を圧倒するほどの力を持つ英国騎士最強の男。

『^{ガーディアン}守護者』の異名を持つ練達の剣士。使う剣は、聖なる太陽の力を封じ込めた『^{シャイニングブレード}太陽剣』

剣術だけなら、騎士団長に匹敵する力の持ち主。

第六位―― フィオナ・ハーベル

魔術界の至宝である、絶世の美少女。イギリス七大貴族の筆頭の出身。

特殊能力『ウエスタの告示』により、魔術を霊装、詠唱、魔方陣の必要無しで発動するなど、対魔術に関しては最強レベル。
彼女の歌う歌には回復魔術の効果がある。
しかし、格闘戦には非常に弱い。

第七位―― 神裂火織

ウエスタンルックサムライガール。『神裂に勝てるのは神か天使だろう』と称される聖人。実際そうでもない気がする。

第八位―― 一方通行（通常Ver）

学園都市最強の男。しかし、脳に重傷を負っているためこの順位。

第九位―― 削板軍覇

『世界最高の原石』である根性男。

御坂美琴のレールガンを歯で止めるなど、とにかくめちゃくちゃな暑苦しい野郎。

第十位―― エリシア・ミス

ロイ・ミスの妹。類い稀な才能に恵まれ、その魔力はキャーリサ王女と並び称される才色兼備の美少女。四大属性、聖属性、闇属性、重力魔術、無属性魔術、回復魔術、武器強化術式など、多種多様な

魔術を操る魔術師でもある。

また、剣の腕にも、体術にも、非常に優れている。

また、フィオナの専属侍女でもある。彼女の料理は絶品。
ある意味一番凄い人。

第十一位―― 御坂美琴

いわずと知れた常盤台の『超電磁砲^{レールガン}』
でもスルーされるなど、残念な役割。

第十二位―― 浜面仕上

無能力者なのに学園都市四位を倒した凄い人。
滝壺ラブ。

第十三位―― 麦野沈利

無能力者に負けちゃった残念なレベル5。
優一に右腕を斬り飛ばされるなど一番かわいそうな人。でも立ち直
って和解した健気な人。

こんなものでしょうか。

オリジナルキャラ込みです。

自分の独断なので、気にしないでください。

外伝―強さランキング！(後書き)

何度も書きますが、独断です。

次回は本編です。

それでは。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4645x/>

とある当麻の性転換

2011年11月23日21時57分発行